

「アイヌ文化研究の現状—噴火湾沿岸のアイヌ資料—」

北海道立アイヌ民族文化研究センター 研究課長 古原 敏弘

■はじめに

北海道内の多くの市町村の博物館、郷土館、資料館には、アイヌの生活文化に関する道具（アイヌ民具）が収蔵されている。それらの施設は、昭和40年代以降に設置された新たな施設が多く、資料の多くも、その際に収集されたものが多いと思われる。

しかし、そうして収集されたアイヌ民具には、製作・使用年代や使用地、収集地といった背景情報（バックデータ）がない資料が多いため、それらの収集資料を用いての地域のアイヌ民具の変遷や地域差を解明するなどの研究対象となりにくかった。実際にアイヌ民具を用いた研究は、現在でも少ないのが現状である。

ところが、海外の博物館には、資料の収集年代、収集地などのバックデータを持つアイヌ民具資料が所蔵されていることが知られ、1980年代からドイツを中心に所在調査が始まった。その後、アメリカ、ロシアと調査が行われ、2001年のサハリンの調査まで約20年間にわたって海外の博物館で調査が行われた。

その調査の大きな成果として、海外の博物館には、主に19世紀末から20世紀初頭（第1次世界大戦まで）にかけての北海道、サハリンで収集された約13,500点にもおよぶアイヌの生活用具が所蔵されていることが判明した。また、これまで日本国内には資料の少ないサハリンアイヌの資料が増えたことが上げられる。

噴火湾地域の資料についても、海外でのアイヌ民具資料の調査で、ヨーロッパやアメリカに収蔵されていることが判明している。

現在は、その海外での調査の結果から、国内資料にない製作地や制作年代などの情報を付加するための比較研究を行うために、北海道内のアイヌ資料の調査が行われている。

ここでは、これまでの海外の調査や、北海道内での資料調査の結果から、噴火湾地域のアイヌ資料の所在や内容について紹介し、あわせて、噴火湾地域のアイヌの物質文化研究の現状を紹介する。

■噴火湾沿岸のアイヌ資料

噴火湾の海岸線には、古くから多数のアイヌコタ

ン（集落）があったことが知られており、この地域で製作された民具の中でも、衣服には特徴があることが知られている。しかし、そのほかのアイヌ民具については、資料が少ないこともあり、研究は進んでいない。

1 伊達市内の資料

・有珠善光寺資料

善光寺の資料約100点には、衣服、漆器、弓、イクパスイ、刀などのアイヌの民具としてよく知られているものが含まれている。資料の多くは漆器、イクパスイを主とする儀式用具である。その中の衣服資料3点の特徴は、後述のバラートシ資料と比べてみると興味深いものである。

また、衣服以外の資料としては、織機の部品などは、この地域の資料と考えられる貴重な資料であるが、残念なことに、この織機で織られたアトウシが残されていない。

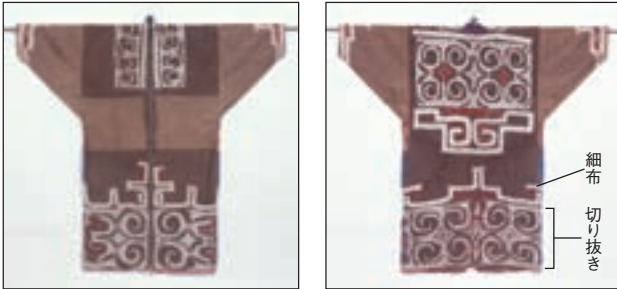
この3点の資料を比較してみると、大小の端切れを接ぎ着物を作り、その上に、細長いベルト状に加工した布を用いて文様を施すことは共通している。

違いとしては、文様がベルトだけのもの（資料1）、切抜き文様のあるもの（資料2.3）、縫製の糸が、イラクサだけを用いるもの（資料1）、イラクサの糸と木綿糸の両方を用いているもの（資料2）、木綿糸だけのもの（資料3）とがある。



資料1

襟^{マチ}を施した木綿の縦縞の着物に背、裾、袖口、前身頃^{マタ}に文様を施す。文様は白木綿布をベルト状に加工したものを主に用いるほか、一部に赤色のものを加えている。縫い糸はすべて撚りのないイラクサの糸を用いる。裾を三つ折りで縫いとめるなど丁寧な作りの着物である。



資料 2

茶の縦縞と無地の端切れを接ぎ、紺の縦縞の生地で襟付きの着物として、背・裾と前身頃に切り抜きで文様を施し、さらにその周囲に細布で文様を施す。裾は平縫いで折り返しが無い。文様の一部は絹布である。縫糸は大部分が木綿であるが、一部に撚りのないイラクサの糸を使用している。



資料 3

紺の縦縞の生地に文様のある生地を接ぎ、背と裾に切り抜き文様を施し、さらにその周囲に細布で文様を施す。縫糸は木綿糸を使用している。

この細長いベルト状に加工した布を用いて文様を施す着物は、噴火湾地域で作られた衣服とされており「ルウンペ」と呼ばれるものである。また、この着物は裾が付けることが多いのも特徴となっている。

・有珠4遺跡

伊達市内では既に有珠オヤコツ遺跡など何箇所かのアイヌ期の遺跡が発見されている。中でも昨年からの発掘の行われている有珠4遺跡の墳墓の副葬品、中でも刀鞘などは伝世品と直接比較が可能なほど保存状態がよいものであり、墳墓の形成年代が火山灰との関係で明確なことから、アイヌ民具の年代を考える上で貴重な資料となるものである。

2 伊達市周辺の資料

伊達市内の周辺の噴火湾沿岸の市町村にもアイヌ

民具資料の存在や、噴火湾地域で収集されたと思われる資料の存在が知られてきている。

・ピリカ会資料

ピリカ会とは森町の村岡格が明治末から大正にかけてアイヌ文化研究を目指して組織したものである。このピリカ会は当時の噴火湾地域のアイヌの状況を撮影し、絵葉書を刊行したほか、各種の民具を収集して展示も行っていった。当時日本を訪れた外国の研究者なども、北海道を訪れた際には村岡を訪ねていることが研究者の記録にも、村岡の記録にも残されており、その名は広く知られていたようである。

ピリカ会の資料収集には、村岡と親交のあった八雲町落部に居た弁開胤次郎が大きく関係しており、その収集資料は落部のコタン周辺を主とするものと考えられる。また、ピリカ会の活動年代などから、これらの資料は1920年代に収集された資料と考えられる。道南地域では、もっともまとまったアイヌ民具資料といえる。

このピリカ会の収集した約300点の民具は、村岡が松前藩の藩医の家だったことから、現在は松前町に寄贈され、松前城資料館に収蔵されている。また、ごく少数であるが七飯町、八雲町などにも残されている。

弁開胤次郎に関しては、八雲町の落部八幡宮に、アイヌ語を刻んだ石碑や、銀婚湯に金糸でアイヌ模様の刺繍を施した半纏なども残されている。

・豊浦町所蔵資料（佐茂資料）

豊浦町内（辺部）の民家の解体の際に発見された資料で、漆器を主体に約200点のまとまった資料である。着物どの資料は含まれていないが、イナウやキツネ頭骨、サパウンペなど儀礼具が含まれている。イクパスイ 1点には豊浦市街の裏山から見た洞爺湖中島、羊蹄山、ニセコ連山を立体的に彫り、漆をかけたものなど地元でしか作りえないものが含まれている。また、組になる多量の漆器の椀、盆、膳など、アイヌ民具として残る漆器の流通経路を考える重要な資料と考えられるものである。これらは豊浦町の指定文化財となっている。

その他にも、長万部町教育委員会には、昭和40年代に地元で収集した資料約40点が所蔵されており、一部は町民センターで展示されている。八雲町内の権久家に伝わっていた資料約40点が市立函館博物館に収蔵されている。

これらの資料については、まだ詳細な調査は行われておらず、今後噴火湾地域のアイヌ民具の地域的特徴を導き出すための比較研究の対象となる資料である。

3 海外資料

・ヨーロッパ

バラートシ・バログ (1870～1945) はハンガリーの人類学者で1914年にドイツのハンブルク市立民族学博物館の依頼により、北海道とサハリンで資料の収集を行った。その収集した資料のうち約300点がハンガリーのブタペスト民族学博物館に所蔵されている。ブタペストに所蔵された資料については1999年に調査が行われ内容が判明しているが、資料収集の依頼元であるハンブルク市立博物館の資料約500点が未調査であり、その収集資料の全容は明らかになっていない。また、収集の足跡を示すものや、収集地の記録も今のところ見つかっていない。

このバラートシ資料に含まれる衣服には、サハリンで作られたイラクサ製のもの1点のほか、木綿の衣服が5点含まれている。

その5点の木綿の衣服の施文の特徴として、端切れを接ぎ合わせて着物に仕立て、細いベルト状に加工して文様を施しているもので、5点とも縫糸はイラクサの撚りのない繊維を用いているなどの特徴があり「ルウンペ」の範疇に入るものである。前述の有珠善光寺の資料1とも類似した資料である。

おそらくは、バラートシ・バログが訪れ、資料を収集した場所の一つが有珠であったことを示す資料と考えられる。

・アメリカ

噴火湾地域のアイヌ資料で、これまでに判明している資料には次のようなものがある。

1900年、生物学者のバシュフォード・ディーンは噴火湾北沿岸や胆振・日高で収集を行った。この資料は現在アメリカ自然史博物館に収蔵されている。

1901年、アメリカの医師、ハイラム・H・ヒラーは小谷部全一郎、白井柳次郎らの協力で資料を収集している。この資料は現在ペンシルバニア大学考古学人類学博物館に収蔵されている。両者とも、自然科学の研究者として資料の背景情報を残したことに

特徴がある。また、両者の収集資料のうち、約100点に噴火湾地域の地名がある。

・ロシア

ロシアの資料調査では、噴火湾地域の資料はほとんど確認されていない。

しかし、ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵の資料中の、千島収集とされる衣服は噴火湾地域で作られたものと考えられるものがある。羽織を再利用し、細いベルト状に加工した木綿布や絹布を用いて文様を施してあり、「ルウンペ」の範疇に入る資料である。縫い糸もイラクサを用いている。

これまで、アイヌ民具に関しては、バックデータのない資料が多く、時代性や地域性を考慮せず、アイヌ民具というひとくくりで扱われてくることが多かった。

海外から始まったアイヌ民具資料調査と、それに続く道内での資料調査で、資料の所在や概要が判明してきており、アイヌ民具の歴史の変遷や地域差研究へのデータが飛躍的に増えている。海外資料との比較などから、アイヌ民具の研究が進むものと考えられる。これらの研究にとって、今後、噴火湾地域は、道北、道東などの道内各地と本州の間にあって、民具資料の歴史の変遷や地域差の比較研究にとって重要な地域となると思われる。

■参考文献

- ◎市立函館博物館 1979『蔵品目録 -1- <民族資料篇>』
- ◎APb- アイヌプロジェクト調査団編 1998『ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』草風館
- ◎古原敏弘・ヴィルヘルム = ガボール編 1999『ブタペスト民族学博物館所蔵 バラートシ バログ コレクション 調査報告書』北海道立アイヌ民族文化研究センター
- ◎小谷凱宣編 2004『海外のアイヌ文化財：現状と歴史』(第17回「大学と科学」公開シンポジウム発表収録集) 南山大学人類学研究所
- ◎北海道立アイヌ民族文化研究センター 2005『ピリカ会関係資料の調査研究』
- ◎小谷凱宣・荻原真子編 2004『海外アイヌコレクション総目録』南山大学
- ◎児玉作左衛門・伊藤昌一 1968『アイヌ服飾の調査』『アイヌ民俗資料調査報告』北海道教育委員会
- ◎福田茂夫・高橋理・古原敏弘 2005『豊浦町所蔵のアイヌ資料』『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 11号』北海道立アイヌ民族文化研究センター
- ◎木立大忍・木立真里・福田茂夫 2006『善光寺資料総目録』善光寺